

門真のめざす教育とこれからの学校づくり実施方針(案)に対する  
意見募集結果について

1. 案件名

門真のめざす教育とこれからの学校づくり実施方針(案)

2. 意見募集期間

令和3年2月22日(月)～令和3年3月15日(月)

3. 実施機関(担当所管課)

(1) 名称： 教育部 教育企画課

(2) 電話番号： 06 - 6902 - 5779

4. 閲覧場所

教育企画課(市役所本館2階)、市情報コーナー(市役所別館1階)、市役所本館1階入口、保健福祉センター、南部市民センター、市民プラザ、市立公民館、市立文化会館、図書館本館、ルミエールホール、女性サポートステーションWESS、砂子みなみこども園、脇田小学校、砂子小学校、四宮小学校、北巢本小学校、東小学校、第四中学校、第五中学校、市ホームページ

5. 受付した意見等の件数

2件

6. 意見に対する考え方

意見に対する市の考え方は別紙のとおりです。

門真のめざす教育とこれからの学校づくり実施方針(案)に対する意見

	意見の概要	市の考え方
1	<p>① <u>学校統廃合は地域から学校を遠ざけ、地域と一体となった学校づくり、学校を核とした地域づくりに逆行する。また、小規模校のよさや、少人数学級のよさがなくなり、一人ひとりの児童・生徒にゆきとどいた教育を行うことが困難になる。</u></p> <p>方針案は、「小規模校や大規模校が一律に悪いということではなく」といいながら、具体的な方針では小規模校は問題があるとして「よこのつながり」「たてのつながり」を強くするために小規模校化した小学校を統廃合することを提案している。少人数学級のよさについてはすでに明らかにしたところであるが、全国で学校統廃合がすすんできた結果として20人以下の小規模学級が急速に減少(2006年19.7%⇒2019年12.5%)している実態を見るならば、統廃合によって少人数学級のよさが失われていくことは明らかである。少人数学級、小規模校のよさを生かした教育の研究・実践として、「全国へき地教育研究会」では、「分かる・できる喜びを実感し、自信をもって学ぶ児童の育成 ～考え、判断し、表現するアウトプットを重視した学習を通して～」 「地域の教育的課題を踏まえ地域と連携して豊かな心を育む教育活動の創造 ～キャリア教育を柱にした実践を通して～ 共に学び合い、高め合う人間性豊かな子どもの育成～」 「人・学び・将来とのつながりを大切にしたG授業を通して～ 社会とよりよく関わり、未来の創り手</p>	<p>学校は地域コミュニティの核として、地域と深い関わりがあり、大きな役割を果たしています。ご意見のとおり、学校統合により校区が拡がり、物理的に遠ざかることや通学時間が増えること等は、課題のひとつであると認識しております。一方で、校区が拡がることにより、校区内で子どもたちに関わることができる大人が増え、多様なつながりを持つことができるなど、門真市のめざす「人とのつながりの中で学び・育つ学校づくり」につながるものと考えております。</p> <p>今後、「地域に学び、地域とともに歩む学校」やまたその学校を核としたまちづくりに向けて、ご指摘の点も含め新たな学校区における地域コミュニティの核としての学校の在り方や、効果的な運営方法等について、保護者・地域・学校と行政が連携しながら検討してまいります。</p> <p>また、学校配置につきましては、本市では高度経済成長期の人口急増期に合わせて、多くの学校を新設したのと同様に、人口動態や社会情勢等、実情に合わせた不断の検討も必要です。</p> <p>ご意見のとおり小規模校ならではの利点があることも認識しておりますが、学校生活においても、教職員も含めたたくさんの人と関わりを持つ機会を確保し、多様な考えや価値観に触れながら学ぶ経験を可能とする環境が大切であると考えております。</p> <p>特に、一部の学校で複式学級が発生する可能性がある状況は、学習や集団活動における各種制約等も考えられ、大阪府に隣接する本市の立地条件等も考慮すると、本市のめざす「多様な人とのつなが</p>

<p>となる児童生徒の育成 ～」「ICTを活用した主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを通して～ 目的意識をもち、確かな学力を身に付けた生徒の育成 ～表現力やコミュニケーション力を育成する活動を通して～」「基本的な学力を身に付け将来の夢の実現に向けて努力する児童の育成 ～相互の学びを生かした学習指導を通して～」「学びを生かし、じっくりと考え主体的に表現する力の育成 ～国語科・算数科における複式指導の研究・実践を通して～」などの研究テーマの下、地域の特色と少人数学級、小規模校のよさを生かした教育実践の交流が毎年行われている(令和3年度は10月28～29日宮崎県で開催)。少人数学級、小規模校だからできる地域と密着した教育は昔から今も行われているのであって、そうした先輩の地域の実践に学ぶことで門真という地域での新たな少人数学級、小規模校教育が可能になる。また、北海道教育大学「へき地・小規模校教育研究センター」では、地域に根ざした少人数学級・小規模校教育研究の成果を「へき地・複式学級の学習指導の手引き」としてまとめ、全国に分布する小規模校の豊かな教育実践の広がりを支援している。</p> <p>こうした実践と研究に学ぶことで地域に密着した学校づくりと持続可能な地域づくりが具体的に展望することができる。学校統廃合によって地域から学校が消えてしまった地域では、通学に時間がかかり、学校と地域の結びつきが薄まり、コミュニティの拠点であった学校が遠くに離れたこ</p>	<p>りの中で自分の生き方をめざす教育」を実践するためには、学校の統合も含めた学校再編が必要であると考えています。</p> <p>その上で、学級編成や学級規模につきましても、本市として小規模化に対処することが直ちに少人数学級の編成を阻害するとは考えておりませんが、国の定める学級の編成基準を参酌しつつ、子ども一人ひとりのきめ細やかな指導が行えるよう検討するとともに、より良い教育環境となるよう学校づくりを進めてまいりたいと考えております。</p>
--	---

<p>とで地域住民の交流の機会が減り、地域がさびれたという事例も耳にする。私が勤務していた旧北小学校校区でも統廃合の結果、廃校になり、校区にあった神社に写生に行ったり、秋祭りを見学したり、工場見学や商店街見学、スーパー見学が校区の中で気軽に実施できていたことから比べると子どもを見かけることが少なくなったことは否定しようがない。</p>	
--	--

② 小中一貫教育にはメリットだけでなくデメリットも多くあり、小中一貫校（義務教育学校）への再編・統合は、さまざまな教育問題を引き起こすことが懸念される。

小中一貫教育は、「中1ギャップ」の解消を目的に、小学校と中学校の段差をなくすために小中学校を1年から9年までの一つの学校に合体させて「一貫した教育」を行うというものである。特に、施設一体型一貫校では、同じ校舎の中で多くの学校行事や活動を小中学生が共に行うので、小中一貫教育の特徴が顕著に表れやすい。すでに施設一体型小中一貫校として開校・運営されている学校の教職員から実態を聞き取ったり、学校公開で一貫校の実際の様子を見学したりしてきた経験から意見を述べたい。日常的に小学生と中学生が同じ校舎（敷地内）に通い、生活の多くの時間を共に過ごすので、「小中の段差をなくす」という点についてはメリットとしてあげることができるという意見が多い。ただし、子どもの成長・発達にとって、「小中の段差」は必要という声も少なからずあることも事実である。「段差」を意識しながらそれを乗り越え、克服し、中学生として成長していくことが子どもには必要という意見である。他にメリットとしてよく例に出されることとして、「中学生は小学生のめんどろをみたり、お手本になろうと努力するようになり、やさしく、たくましくなる」「教職員は9年間を見通して子どもの指導ができるので、効果的に生徒指導ができる」などがある。こ

小中一貫校（義務教育学校）は、義務教育9年間を見通す中で、めざす子ども像を共有し、子どもたちの発達段階に応じた一貫した教育をより効果的に進めるために有効な施設形態であると考えております。

小中一貫教育については、ご意見にもあるような、小中の段差の解消や9年間を共に過ごすことによるメリットや子どもたちの発達の早期化への対応が挙げられます。

本市におきましては、子どもたちの発達段階に応じた教育のあり方の検討を進めるにあたり、これまでの小学校6年・中学校3年という枠組みにとらわれず、義務教育9年間を見通した中で、全ての学年においてリレーゾーンをつくっていくことが大切であると考えており、そのためには小中一貫教育の視点が必要であると考えております。

現在の小学校・中学校の枠組みにも、理由やメリットがあることは認識しており、小中一貫校がすべての解決策であるというものではありません。

小中一貫校（義務教育学校）の設置には、新たな課題もあると認識しており、門真のめざす教育と、子どもたち9年間の成長に向けて、課題となる事項については、保護者・地域・学校間で共有した上で、解消方策や工夫できる方策等について協議しつつ、共に検討を進めてまいります。

れらについても事実として認められるケースがある一方、逆効果として現れるデメリットとして指摘する教職員の声もある。たとえば、施設一体型小中一貫校の中学生が「荒れ」て、生徒指導が難しくなった場合、その影響は小学生にも直接波及し、メリットではなくなるというケース、保健室が一つしかなく、中学生が「たむろしている」と小学生は安心して保健室に行けないというケース、小中の交流の活動や行事をする際、小学生が「お客さん」になりがちであるという問題、小中の授業時間にずれがある（小学校 45 分、中学校 50 分）ためにチャイムが何度も鳴って混乱する、逆にチャイムをなくしたので小学校低学年が困るという問題、6 年生が最高学年として活躍する機会がなく、6 年生の成長にとってマイナスであるという問題、小中の交流の時間が増えた分それまで行っていた学年の活動や行事を取りやめざるを得なくなる問題、中学校の各種の試験の迷惑にならないように小学生やその担任が静かにするよう神経を使う問題、統廃合によってできた小中一貫校も多いので、校区が広域となり、教職員が地域に密着して児童・生徒をフォローしたりすることが難しくなったとか、災害が発生した際に安全にかつ迅速に保護者と連携をとって児童・生徒を下校させるのが難しいなど、多岐にわたる問題点を指摘する教職員も少なくない。

<p>③ <u>方針案が示す縦や横、地域のつながり、人間関係を大切に子どもたちの確かな育ちを保障する学校づくり、地域全体、門真全体のブランド向上、地域の将来を担える「自立した人間」を育み、自立した地域の基盤構築を図る「学校を核としたまちづくり」をすすめるために、現在の学校を地域に残し、小規模校のよさを生かしながら地域に密着した学校づくりをすすめる。</u></p> <p>家から学校へ通う通学路は、それ自体が子どもにとってさまざまな経験をする大切な世界である。その世界は、自分が住み、生きる地域であり、通学の道を歩きながら地域の自然や社会、人間関係を学ぶ学びの場でもある。自分の家から近くにある学校まで、その学校の校区の範囲をゆっくり時間をかけて歩いたり遊んだり、生き物や植物を発見したり、地域の人と関わることは、方針案が示す「たてとよこのつながり」を大切にする教育につながる。統廃合で学校が地域から消え、通学が遠くなることは、自分が生きる地域を歩く時間を減らすことになる。自分の住む地域を素通りして学校へ急がなければならない学校のあり方は方針案が示す方向と真逆なのではないだろうか。中教審答申『令和の日本型教育』では、日本の学校教育の果たしてきた積極的な側面として「学校の福祉的な役割」を指摘している。門真市の地域的な特殊性を考えると、この「学校の福祉的な役割」を重視することが不可欠である。「学校の福祉的な役割」をより機能的かつ効果的に発揮</p>	<p>本市の考えは①②のとおりです。今後の検討については、学校、保護者、地域の関係者のご意見も拝聴しながら、子どもたちの確かな育ち、地域や門真全体のブランド力の向上、地域と共にある学校づくりに努めてまいります。</p>
---	---

するためには、学校が身近な場所にあることが不可欠である。「福祉的な役割」をもつ学校を統廃合することは、その地域に住む課題を抱える子どもの発見とゆきとどいた支援にとって大きなマイナスとなることは明らかである。小規模校化しても地域に学校を残し、少人数学級と小規模校のよさを生かしたきめ細かなゆきとどいた教育と福祉的支援を保障する学校があることが地域の価値を高め、門真全体のブランド向上、自立した地域の基盤構築を図ることになると考える。



2	<p>19 ページ『実施方針2 第五中学校校区の再編について』について</p> <p>①校区が国道163号を挟み、南北に広くあります。1小1中の施設となると災害時の避難場所の確保としては広すぎると考えられますので、避難場所の設置の検討をお願いします。</p> <p>②東小学校児童の進学先について『対象となる東小学校及び保護者等、地域の関係者等と共に検討を行う場を設置』とある通り、地域に住む児童生徒、住民にとって安心できるよう引き続きお願いします。</p>	<p>①ご意見のとおり、学校は子どもたちの教育の場であるという側面に加え、地域活動の拠点や災害時の避難場所等の防災拠点としての役割を担っております。</p> <p>ご意見の内容も含め、中長期的なまちづくりの視点から、地域の意見等を伺いつつ、検討してまいります。</p> <p>②現状の子どもたちや地域のつながりを踏まえ、学校及び保護者や地域の意見を十分に伺いながら、児童生徒や住民にとって安心できる学校づくりに向けて具体的な方向性や進め方について今後検討してまいります。</p>
---	---	---